

日田高校定時制 学校だより ♪希望・理想・使命♪

2学期に向けて 教職員メッセージ! その①

日々を真剣に!
校長 藤永直也



この夏はリオのオリンピック、パラリンピックで熱戦が続いた。世界レベルの最高の舞台での選手のパフォーマンスには、想像を絶する努力、コーチや家族などの支えがある。報道ではよくメダルの数を言われる。確かにそれも大事だが、この舞台に立つまでの過程が何よりも意味がある。積み上げた努力の背景には多くの苦労があったはずである。そして、この舞台ならではの交流や相互理解、経験した者しか分からない達成感・貴重な価値がそこには存在したと思う。



「夏から秋へ」

蒲池健司



長い夏休みが終わりました。この40日間の自分を覚えていまして、かく仕事にアルバイトに明け暮れた人。暑さにぼおっとしていた人。ひたすら遊んだ人。テレビに夢中だった人。旅行した人。久しぶりの知人に会った人。それぞれがそれぞれの夏を体験したはずですが、40日間の中で思ったこと考えたことが財産になっていくと思えます。夏の終わりに聞いてみるとどんなことをイメージしますか? 夏が終わるとなんとなく寂しさを感じませんか? 私は、「井上陽水の少年時代」や「森山直太郎の夏の終わり」が頭の中に流れてきて毎年、寂しさを覚えます。それは情熱的な季節が終わったからかもしれません。夏は夏休み、海に山、甲子園に夏フェス、今年はオリンピックとイベントの多い季節ですから、「食欲の秋」、「読書の秋」、「スポーツの秋」、「芸術の秋」...これもまた楽しみが多い。涼しくなるとそれまで食べられなかった食べ物も食べたいなったり、読む気にもなれなかった本が読みたくなったり、鈍った体を動かしてみようといった心境の変化があるのかも知れません。また頭もすっきりして勉強がんばろうという気持ちも出てくるかもしれません。いよいよ2学期です。季節とその季節毎にいろいろな楽しみを持ってきてくれます。夏休みが終わっていきやだなあと、次の楽しみを見つけてみましょう。

「清竹久美香の2016夏休み日記(まどめ)」



スポーツ観戦が大好きな私のこの夏は、生きてきた中でこれほどオリンピック観戦を真剣にしたことがないというぐらい、勤務時間以外はずっとテレビにかじりついてきた。世の中のニュースや夏の甲子園なんか興味なし。テレビも2画面にして、それぞれの競技で日本人選手の活躍シーンを一瞬たりとも見逃すまいと。まさに開催中の2週間、興奮や感動と不規則な睡眠時間の毎日だったが、この人生初の体験が自分でも可笑しく新鮮に思えた。このように好きに自分の時間を使うことができることが、今はとても幸せに思う。私は今年ある決断をした。自分にとって生きがいと思っていたものを手放してみた。まさか自分の人生がそうなるとは、自分でも想像できなかった。でも、そのおかげで世の中の面白さを新発見しては、感動と感謝の日々である。(↑人生の断捨離で成功?)



感動

吉岡紀江



今年は何が起ころかわからないから面白い。本当!だからこそ、おもしろく、わくわく、ウキウキ、楽しんでこれからも生きてみようと思う。ますます若返りそう、フフフ(笑)

今年は例年にも増して猛暑日が20日以上も続き、本日に、本当に暑い夏でしたね。

一方で、今年はオリンピックも開催され日本選手の健闘に、一人夜中テレビを観ながら拍手や歓声で騒がしい日々を送り、各競技の選手の活躍に感動と勇気をもらいました。

毎日の厳しい練習に耐え、晴れてオリンピックの舞台に立ちメダルを手にした人、そうでない人、すべての選手も「4年間すべてのことを犠牲にしてこのオリンピックにかけ苦しい練習をして頑張ってきた。」と。

この言葉を聞いた時、この感動の源はこれだったんだ、自分には到底計り知れない努力に努力を重ねた賜だったんだ、と確信しました。本当に感動と勇気をありがとう、って言いたいです。

皆さんはオリンピックに感動しましたか?どんな場面に感動しましたか?



人生明るい方を見よう

小野栄昭



私の好きな番組に「三ツの「三ツ」がある。簡単に言えばショートコントなのだが、お笑いのウッチャンをメインに女優も混じって演じるコントは私の笑いのツボをくすぐる。下品すぎず、かと言って三ツ的でもなく、その中庸がいいのかもしれない。

その「三ツ」が「人生明るい方を見よう」をキャッチフレーズにして熊本大震災の復興支援に一役買った。九州や全国からそれぞれの立場で支援が行われている。

私たち定時制の職員も市役所が販売している復興Tシャツ(くまもと進撃の巨人のキャラが支援に立ち上がっているイラスト入り)を買ってささやかながら協力している。楽観主義者の私にとってこのコピーはまさにぴったりである。また2学期も乗り越えられそうな気がしてきた。



幸せ（幸福）になりたいいな！

藤原 耕一



今年の夏は「リオ、オリンピック」もあり、スポーツに関する記事が新聞・テレビ等でたくさん取り上げられました。特にオリンピックでは、メダルを獲得した選手の幸せそうな笑顔や喜びのコメントを聞く中で、「○○さんのためにメダルを・・・」や「○○さんに獲得したメダルを・・・」など、自分が努力したことよりも自分を支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを先に出す人が多く見られました。そんな様子を見ながら、凡人である自分が幸せ（幸福）になるためにはどうすればいいのかと考えているうちに、ある言葉と出会いました。「最もよく人を幸福にする人が、最もよく幸福となる。」という元立石電機社長の立石一真氏の言葉です。立石さんは、「幸せ」というものは、直接つかめるものではなく、人を幸せにすることの反応として、自分が幸せを感じるものです。」と書いています。また、自分が幸せ（幸福）になるには、まず家庭・友人・先生など自分の周囲にいる人たちを幸せ（幸福）にすることで、自分が幸せ（幸福）になっているのと言っています。人は誰も幸せになりたいと思っています。そのためには、周囲の人を幸せにする「あいさつ」から始めましょう。そう！「あいさつ」は優しい心のプレゼントであり、手軽に相手を幸せにする魔法のことばです。1学期のアンケート結果でも、あいさつをされたら返す人は約78%でしたが、自分からあいさつをする人は約49%でした。9月は「あいさつ月間」でもあります。自分からあいさつを交わすことで、周囲の人を幸せにし、自分も幸せ（幸福）を実感してはどうでしょうか。この割合（%）が2学期にはさらに上がり、今まで以上に、幸せ（幸福）に満ち溢れた学校に変わっていったらいいと思います。

二学期も頑張りましょう

吉山 秀樹



まだまだ残暑厳しいですが、長い夏休みが明け、二学期が始まります。今年の夏は、四年に一度オリンピックがブラジルのリオデジャネイロであり、毎日いろいろな競技のスポーツ中継がテレビで放送されて多くの熱戦が繰り広げられ、たくさん感動をもらいました。私がとても印象に残ったことは、試合を終えた選手がインタビューで、応援をしてくれた人達や今まで支えてくれた人達に『感謝』の言葉を必ず言っていたことです。それと、テレビ放送の中で選手の生い立ちや家族の思いやこれまでに重ねてきた努力の道筋や苦悩などにたくさん胸打たれるシーンがあり、オリンピックという華やかな舞台の前には、たくさんの方の支えとを知ることができてとても感銘しました。あらためて、これがスポーツをすることで養われる人間性や社会性だと思えました。皆さんもオリンピックを見た人とも多々お話ししますが、どうでしたか？二学期は、たくさん学校の行事があるので、お互いに協力し合い成功させていきましょう。そして充実した思い出に残る二学期にしましょう。



この夏をふりかえって

水谷 昌弘



この夏の大きな話題はリオオリンピックだったといえるでしょう。私はブラジルに親戚がいるのでブラジルの文化には理解があると思っています。今回、日本の金銀銅のメダルラッシュで、ブラジルの文化にはあまりふれられていないように思えました。が、ブラジルの文化や風土について知ることが多かったと思います。ちなみにブラジルの首都は、リオ・デ・ジャネイロやサンパウロではなくブラジリアです。そう考えると4年後、首都東京で行うオリンピックは盛大なものになると考えます。

8月下旬には「マジック教室」に行ってきました。教えるのではなく習う側です。三文化センターの福岡教室です。博多リブレインの11階で教室が10人以上ありました。私が参加した教室は、参加者が20人以上で小学生がほとんどでしたが、後ろの席に3人の若手のプロマジシャンがいました。3つ、4つ簡単なものを教えてくれるのですが、難しくてあっという間に時間の90分が過ぎました。自分の想像していた以上に収穫がありました。ともかく、周りの小学生2年生、4年生に怖がられなくてよかったです。とても穏やかな笑顔の多い時間でした。今年も福岡市内（や福岡県内）にはマジックを見せるカフェやお店ができています。ここ何年間のうちでは一番、数は多くなっているのではないかと思います。その反面、マジックをやめる人がいたり、閉じる店もありました。最近はまだマジックのブームがきている気がします。テレビでは昨年くらいからブレインダイブという言葉が出てきました。関西の新子さんがスマートフォンで驚きいっぱいマジックをされています。マジック新世代の台頭です。私も私なりにマジックに取り組んでいこうと思っています。

この夏は日本のマジックの歴史というか、どうしてマジック業界が今のようになっただかを知った夏でした。つまり今、マジックを見せる店（マジックバーなど）が福岡市内に8軒ほどありますが、なぜそういう形態であるのかということです。これを書くと長くなると思いますのでこの辺りで。

花・火

江藤 恵美



「日田の花火」といえば5月の川開き観光祭だが、夏休み中にも何度か打ち上げの音が聞こえてきた。彩り豊かに夏の夜空を焦がした後、跡形もなく消えてしまふ花火に、人は何故魅惑されてしまふのだろうか。◇この国に暮らす人々は昔から、移ろう四季折々の美しい自然に囲まれ、また一方で、地震や台風、津波といった自然災害の脅威にさらされてきた。その中で「限りあるもの、形あるものはいつか滅びる：永遠不滅のものはない」ということを体感し、滅びゆくものへの愛惜や憧れを民族のDNAとして遺してきたにちがいない。だからこそ、満開の桜が春爛漫を告げながらも深く散る姿を愛で、一瞬の煌めきの花火に心躍らせるのだ。◇人生の春、「青春」もまた、限りある一瞬の煌めきである。絶世の美女とされる平安時代の歌人、小野小町は「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に（せ）かく美しく咲いた花が長雨の間にしぼむように、私の美しさも色あせてしまった。ぼんやりと物思いにふけていた間に……」と詠んだ。いや、春は一度きりではない。（いくつになっても）自分の春はこれからだと思っても、もう一度花を咲かせることもできる。無駄にぼんやりすることなかれ……。と自分に言い聞かせる夏の終わりであった。

